

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 梶 茂樹



米田信子氏の論文は、タンザニア国南西部に話されるバンツー系の一言語マテング語に関するものである。副題に、「動詞構造を中心に」とあるが、これは、マテング語の文法記述において動詞構造の記述が中心的位置をしめるからであり、実際は、音韻論から形態論、統語論、さらに民話やしりとり歌のテキスト、語彙など、言語の共時態のほぼ全ての分野に及んでおり、きわめて包括的なものである。この言語については、今世紀の初頭のドイツ人宣教師による語彙集と比較的最近の現地人による借用語に関する研究を除けば、ほとんどなく、実質的に、この米田氏のものが、世界初の文法記述である。米田氏は、このマテング語を1996年から1999年にかけて3回フィールド調査を行い（調査期間合計約1年）、本研究を完成させたものである。

第1章で、論文の目的と先行研究に触れたあと、第2章ではマテング語の社会言語学的背景が述べられる。タンザニアを含む東アフリカではスワヒリ語が広く共通語として用いられ、語彙、文法の様々な面でマテング語など地方語（部族語）に影響を与えている。世代（年配、中年、若年）、居住地域（田舎、町）などの要因を考慮に入れたアンケート調査により、町に住む若者を中心に急速にスワヒリ語化が進んでいることが示される。ただ、若者の間には言語が民族のアイデンティティーにとって重要だという認識はあり、スワヒリ語を話すことが必ずしもマテング語の衰退に直接つながるとは言い切れない。米田氏は、本論文においては、男性年配者をインフォーマントに、出来る限り古い純粋なマテング語の記述を行なっている。

第3章は音韻論である。母音は7母音、そして母音の長短の音韻的対立があることが示される（前述のマテング人の借用語に関する論文では、この長短の区別は見逃されている）。ただ、長短出現の規則は複雑であり、これが必ずしもすっきりと示されているわけではない。子音に関しては、対立のペアが示されていないということはあるが、体系は明らかである。ただ、半母音の分布については、再考の余地がある。声調は、表面的には高平板調(H)と低平板調(L)、さらに下降調(F)と上昇調(R)が現れるが、基本的対立は高平板調(H)があるかないか(φ)であり、声調というよりはアクセントと言った方がより適切である。これは、たんに語彙的機能(hingu「首sg.」対hing

u「頭当てsg.」)のみならず、文法的機能(twilema「我々は耕す」対twilé ma「我々は耕すべきでない」)も果す。

第4章は、名詞と連帯修飾語である。マテング語の名詞は、他のバンツ系諸語同様、接頭辞+語幹という構造をしており、統語的条件により19のクラスに分れる(さらに、接頭辞につき方により幾つかの下位区分がある)。そして、通常、2つのクラスがペアになり、名詞の単数形と複数形を表わす。名詞の声調の現れとその変化はかなり複雑であるが、一般にはそのパターン数は、語幹音節数をnとするとn+2で表わされる。ここにおいて例えば、語末のHは孤立形では1つ前の音節で実現される(lihiná→lihína「名前sg.」)などの規則が明らかになる。ただ、孤立形においてはどこか最低1ヶ所Hがなければならないとし、名詞の中にHがない場合は語幹の左側すなわち接頭辞がHになるというのは、かなりアドホックな規則のように思われる。

第5章の動詞構造の記述は、本論文の中心的位置をしめる。まず、動詞の形態論的構造を示したのち、それぞれの構成素を詳述する。動詞の変化形は、例えば以下の様な構成素から成る。

d3wágubutukila

d3u-á-gu-but-uk-il-φ-a

主語辞-時制辞-目的接中辞-語根-拡大辞-派生辞-前語尾辞-語尾

「彼は君を追いかけるだろう」

それぞれの構成素はそれぞれの声調を持っており(φの場合もある)、全体のパターンは、原則その総合によって得られるが、これには幾つもの規則の適用を必要とする。米田氏のマテング語における発見の1つは、一見多様に見える声調パターンが、実は音節ではなくモーラ単位で見ると1つのパターンに還元できるということである。

例えば、以下の文は同じ構成要素(主語辞-時制辞-目的接中辞-語根-語尾)を持つ同じ時制(完了過去)のものであるが、語根のタイプが一方は-bag-「配る」(1モーラ)で、もう一方は-beng-「追い払う」(2モーラ)という違いがある。そして全体のパターンは音節で見ると異なっている。ところが、これをモーラ単位で見ると、実は全く同一のパターンであることが理解できる(○をLモーラ、●をHモーラとし、スペースを音節境界とする)。すなわち、主語辞と時制辞が融合した語頭がLで目的接中辞がH、そして語根がLで語尾がすべてLである。こうして見ると、-beng-「追い払う」のように語根が2モーラのもは、声調的に重要なものは、その前半部分であり、

後半部分は語尾と同じ声調を取ることが理解できる。

twagábagi:te ○ ● ○ ● ○ ○

「我々は以前にそれらを配った」

twidzíbě:nga:dʒe ○ ● ○ ● ○ ○ ○

「我々は以前にそれを追い払った」

マテング語は、テンス、アスペクト、ムードにより、また様々な接尾辞がつくつかないかによって、数多くの動詞の変化形を持ち、その声調の統一的記述は容易ではない。米田氏の立てる規則は名詞の場合同様、一部、多少アドホックな感は否めず、のちに、さらに有効な規則を立てうる可能性はあるとは言え、これは現在までのところ最大限の分析努力の結果であると理解する。

第6章は、様々な文タイプの記述である。Be動詞を使ったコピュラ文、所在文、進行表現など、また疑問文、否定文など、さらに複文における関係節、副詞節や並列文など、およそマテング語において考えられる全ての文タイプが、いくつもの例とともに示されている。

第7章はまとめと今後の展望であるが、ここでは、声調の問題や適用形の問題など個別的テーマについては別途、論考を加えていく予定であること、また周辺言語、特に約150年前に分れたとされるンデンデウレ語との比較、さらにはその周辺言語の記述を、マテング語自体の方言的変異とともに視野に入れて研究していきたいとの希望を述べている。

本文は以上であるが、資料として、「ウサギとワニとゾウ」「ウサギとカメレオン」の2編の民話と「しりとり歌」のテキスト、そして2000語以上からなる語彙集とが付録している(A4版で全340ページ)。これらはすべて米田氏が、物理的に非常にアクセスの困難な現地フィールドワークによって得た一次資料を基にした研究成果であり、マテング語にとってはもちろんのことバンツ語研究にとっても貴重な貢献である。

以上を鑑み、本審査委員会は全員一致で、博士(学術)の授与にふさわしいものと判定した。